

松阪牛 かわら版 14号

松阪肉牛共進会予選会



十月二十九日、松阪肉牛共進会の予選会が松阪市の全農三重県本部松阪家畜市場で開かれました。
松阪肉牛共進会は十一月二十七日に松阪農業公園ベルファーム(松阪市伊勢寺町)で開かれる、ことしの松阪牛のチャンピオンを決める会で、予選を通過した五十頭だけが本選に出場できます。
予選会には四十四戸の農家が本選に向け、手塩にかけた八十八頭が勢ぞろい。緊張した面持ちで審査を受けます。



体重測定をクリアした牛たちを、三重県畜産研究所大家畜研究課の森昌昭主幹研究員ら九人の審査員が、体型や肉付き、毛並みなどを一頭一頭丹念に調べました。

審査の結果、三十五戸の五十頭が本選への出場権を獲得。現在、農家の人たちは本選に向け、さらに牛に磨きをかけるために、仕上げ作業に精を出しています。

松阪肉牛共進会は十一月二十七日午前八時から。会場では、午前十時から「松阪牛まつり」と題し、すき焼きの振る舞いや、焼肉コーナー、地域特産品の販売などが開かれる予定です。



匠をたずねて 2

このコーナーでは「松阪牛のふるさと」といわれる飯南町で、古くから松阪牛の肥育に力を注いでいる人々を連載で紹介しています。



森本 宇助さん (88)

松阪市飯南町深野 (その2)

「これは牛のくつ」ー。

宇助さんが取り出したのはわらで編んだ牛の「くつ」。この「くつ」は宇助さんが、山の上にある自宅から松阪駅まで、歩いて出荷していた牛に履かせていたという。

長い道のりを歩く牛に何かあつては大変、という農家の思いからだといひ、出荷の前日には水に浸し、柔らかくした上で4本の足に履かせていた。

当時、農耕で人々とともに働いていた牛は、言うことを良く聞き、足をトントンと手で叩くと、足を上げ、おとなしくわらじを履かせたという。

出荷のために牛を連れて家を出るのは決まって夜明け前。「暑うなると、牛がかわいそうやて、親父に言われましてな」。父親の故・竹五郎さんは牛に関してはとても厳しい人で、妥協は許さなかった。

宇助さんは提灯を下げ、牛の足に「くつ」を履かせ、暗闇をかき分けるようにしながら、ゆっくりゆっくり、坂道を下った。

特に冬の坂道は辛かった。「凍てた坂道は滑る。背中で牛を支えるようにして下ったもんや」。中には、途中で歩くのを嫌がる牛もおお、涙を流したことも。

「野良仕事をしとるおばさんが、かき餅をポケットにねじ込んでくれてな、がんばらなあかん、と励ましてくれたもんや」。今でもこのときのかき餅の味は忘れられないという。

つづく



信頼の証です 松阪牛個体識別管理システム

シールに印字された10ケタの個体識別番号で松阪牛の血統や農家の情報、移動履歴などを知ることができます。

皆さまに安全で安心な松阪牛をお届けする証を目印にお買い求めください。



発行 平成 23 年 11 月 松阪市役所農林水産課畜産係 三重県松阪市殿町 TEL0598(53)4119

松阪牛協議会ホームページ <http://www.matsusakaushi.jp> もご覧ください